

聖書:ヨハネの福音書20章19～29節

説教:信じる者になりなさい

## 1 もし復活がなければ

今朝は、主イエスのよみがえりを覚えるイースター礼拝となっております。聖書には数々の奇跡が記されていますが、そのなかでも最も私たちに驚かすのは死んだ者がよみがえるといふ話でしょう。正直に言いますと、私はイエスを主と受け入れた当初は、十字架の罪の贖いについては信じることはできませんでした。主がよみがえられたというところだけは信じられず、そこだけ切り取って、考えないようにしていました。これは私だけではなく、意外にそのような方が多いのではないのでしょうか。どうしても、死んだ者がよみがえることなど科学的にありえないと思ってしまう。

しかし、仮にイエスの復活はなかったとしたらどうなるのでしょうか。パウロは言いました。「もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます。」(Iコリント15章17節)ということ、よみがえりこそ信仰の核心で絶対に譲ることのできない真理だということになる。最も大切なことなのに、信じるのがもっとも難しい。どうしたらよいのでしょうか。

そこで今日は、イエスの弟子たちがどうだったかを見ていきます。彼らは最初からイエスがよみがえられることを信じていたのか。いいえ。まったく信じていなかった。ではどうやって彼らは信じるようになったのでしょうか。

## 2 イエスのあらわれ(十字架から三日目)

### 1) 戸に鍵をかける

19節。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。『平安があなたがたにあるように。』」

「週の初め」とは日曜日のことです。イエスが十字架で死なれて墓に葬られたのは金曜日の日没前で、ユダヤ人は日にちを数えるときには最初の日も含めるので、金曜日から数えると日曜日は三日目になります。

ここで、「ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた」というところに目を留めます。イエスと弟子たちがエルサレムに入城したとき、人々はイスラエルを解放してくれるヒーローとして期待を寄せま

す。ところが、イエスが逮捕され、祭司長たちが「十字架につけろ」と叫び始めると、手のひらを返すようにして、人々はイエスがテロリスト集団のリーダーであるかのように思い込み、祭司長たちと一緒に叫びます。弟子たちは恐れて、戸に鍵をかけて隠れてしまった。主がよみがえってくださると信じているなら、こんなことはしません。隠れていたということは、信じていなかったということを表します。

### 2) 語られていたのに

弟子たちが主のよみがえりについては何も聞いていなかったというのなら、こうなるのも無理はなかったでしょう。しかしイエスはあらかじめ弟子たちに語っていたのです。2章18節あたりにそのことが記されています。イエスがエルサレムの神殿に立ち寄ったときのことです。人々がイエスに対して「どんなしるしを見せてくれるのか」と言うと、イエスは「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる」とお語りになりました。弟子たちはこれを聞いてどう思ったか。2章22節。「それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばを信じた。」

ということは、あのときイエスからよみがえりのことは聞いてはいたのです。ところが、弟子たちはまったく信じていなかった。そんな弟子たちでしたが、日曜日の夕方イエスは現れてくださると、弟子たちは主を見て喜んだ、と書いてある。主のよみがえりを自分の目で見ました。もう何も恐れるものはありません。では、鍵をはずして堂々とユダヤ人たちの前に行つたのでしょうか。

## 3 イエスのあらわれ(それから八日後)

### 1) 再び鍵をかける

26節。「八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。」八日後とは、次の主の日曜日です。あれから一週間経っています。弟子たちは外に出たのか。出ていない。相変わらず戸に鍵をかけて隠れています。あのとき主のよみがえりを見ているのに、

弟子たちは変わっていない。おや、どうしてと思います。

最初に主が現れてくださったとき、たまたまトマスだけはそこにいません。帰ってみると、主がよみがえられたと言って興奮している。トマスはそれを聞いても、そんなことがあるはずはないと信じようとしません。

皆さんもこのトマスの気持ちが理解できるでしょう。人間として自然な反応ではないでしょうか。弟子の中にトマスのような人がいて、私は心が慰められる思いがします。

また他の弟子たちについても考えさせられます。私がかつてそうでしたが、多くの人はこう言います。「よみがえりなど信じられない。実際にこの目で見たらそのとき信じる。」

トマスは見ていないから、こう言うのはわかります。ではトマス以外の弟子たちはどうでしょう。彼らは実際に目撃した。見たのです。それで信じたのか。信じたのなら、鍵をはずして外に出るはず。ところが相変わらず戸に鍵をかけて隠れている。ということは、彼らはまだ信じていない。まさかと思うでしょう。人は、よく見たら信じますと言いますが、実際は見ても信じない。

## 2) 見ないで信じる者になりなさい

あの冷静だったトマスはどうなったか。よみがえられたイエスを見て、声を失ってしまう。「私の主、私の神」と告白するのがやっつです。現実を受け入れられず、頭が混乱しています。

イエスは言われます。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」これは直接にはトマスに対して語ったことばですが、先ほど見たように、弟子たちはよみがえられたイエスを見ても、なお戸に鍵をかけたまま隠れているのです。見ても、まだ信じられない思いで迷っている。トマスもほかの弟子たちも五十歩百歩、主のよみがえりを受けとめ切れていません。

## 4 信じる者にしてくださるイエス

### 1) 平安があるように

弟子たちでさえこんなありさまなのですから、私たちが主のよみがえりを信じられなくても当然と言えます。しかし、いつまでもそのままではいいところではない。主は三つの方法で励まし、信じるようにと語ってくださいます。

一つ目。イエスが繰り返しお語りになっていることばに注目します。「平安があなたがたにあるように。」三度繰り返しています。これは、「こんに

ちは」というほどの挨拶のことばです。でも挨拶にしてはこんなに繰り返すのは不自然です。何か意味がありそうです。イエスはこう言おうとしているのではないのでしょうか。「あなたがたは、もう恐れる必要はない。安心しなさい。」ユダヤ人に見つかって殺されるかも知れないとおびえていた弟子たちを、イエスは何度も励ますのです。

### 2) 息を吹きかけ聖霊を与える

イエスの励ましの二つ目。22節では、彼らに息を吹きかけて「聖霊を受けなさい。」と言われる。聖書で神が息を吹きかける場面はそんなに多くはありません。私の知る限り、創世記2章7節しかありません。「神である主は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」

戸に鍵をかけて隠れている弟子たち。イエスからご覧になると彼らは死んでいたのも同然だったということです。そんな弟子たちに主は「あなたがたに平安があるように」と語り、霊の息を吹き込まれて聖霊を与える。ここでは主のよみがえりがクローズアップされる場面ですが、実は弟子たちも死んでいた。死んだ者がもういちどのちをいただいていく、そんなふうにも見ることができます。

### 3) 主の御傷を見る

イエスの励ましの三つ目。20節。「イエスは手と脇腹を彼らに示された。」27節。今度はトマスに対してです。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。」

ご自分の手と脇腹に刻まれた傷を見せようと思えます。想像しただけでも恐ろしいことです。なぜ見せるのでしょうか。もちろん、ここに立っているのは他の誰かではない。あのときゴルゴダの丘で十字架につけられて死んだイエス・キリストであることを示し、主が死からよみがえられたことをはっきりと示すためでしょう。

でも、それだけではなくてもう一つある。だれが主のみからだにこのようなむごたらしい傷をつけたのかです。だれが主を十字架で殺したのかです。ローマ兵ですか。確かに彼らが死刑を執行しました。総督ピラトでしょうか。確かに彼が死刑の宣告をしました。祭司長たちと群衆でしょうか。確かに彼らは「除け、除け、十字架につけろ」と叫びました。

では弟子たちはどうだったのでしょうか。イエスの弟子であるというのなら、真っ先に自分たちも

十字架で死ななければならなかったはずです。実際、ペテロそのようにすると言っていた。ところがふたを開けてみたら、弟子たちはみなイエスを捨てて逃げて隠れてしまった。いや、今からでも遅くはなかったかもしれない。私はイエスの弟子ですと名乗って出ることができたはず。それさえできない。弟子たちもイエスを十字架につけたのです。

私たちはどうでしょう。イエスが十字架におつきになったのは、私たちの罪を背負われたためです。私は関係ないということはできません。私たちは主のみからだに釘を打ち付け、脇腹を槍で刺し通した。その傷を、目をそむけずに、見なさいと言われます。私たちを責めるためにそうするのではありません。主は、あなたと結びつきたいと願っているのです。どこで結びつくのですか。罪です。それはどこでわかるか。主のみからだに記された傷を見て知らされるのです。

もしあなたが、主を十字架に追いやった罪人ですと告白するなら、あなたはもう罪の赦しをいただき、永遠のいのちをいただく。たとえそれが信じられなくても気にする必要はない。時が来ると、あなたは信じるようになる。主が励ましてくださっているからです。

主のよみがえりこそ、私たちの喜びであることを、この朝、共に覚えたいと願います。